

家庭は、人間が生まれ育つ生活の根源的な場であると同時に、社会を構成する基本的な単位でもあります。

この家庭は、一人の男と一人の女が共同で築いています。女性の生活や意識が変われば家庭のあり方が変わります。

いま、女性の生活や意識は大きく変わりつつあります。これから女性の生き方と家庭の問題を川辺延子編集員にレポートしてもらいました。

外で働く女性がふえました。結婚をしても、そして子供ができて、それでも仕事を続けていこうとする女性がふえています。女性の生き方がこうも多様になり、しかもその選択が自由になったということ、それは女性が自らの個性と能力をよりいかしていくことができるという意味で、実に幸福なことだと思います。

しかし、こうした傾向が強まる中で、現実には、家事は？ 育児は？ そして夫婦のあり方はどうなるのか、

といった問題がいつてまわることも確かです。女性の生き方が多様化するということ、それはとりもなおさず、家庭のあり方も変わることを意味します。当然さまざまな問題も生じてくることでしょう。そういう意味で、今回は浜松の長坂さんという共働きの夫婦を訪ね、お二人が現在抱えている悩みや問題など、率直なお話、意見を伺ってみました。

妻 長坂 月子 (三十三歳)
 福祉施設保母 勤続十一年
 夫 長坂 輝男 (三十六歳)
 高校教諭 教師歴十二年
 子供 小学校三年、五歳、三歳

家庭では

職業と結婚について

結婚しても仕事を続けていこうと思っただけですか？

妻 結婚して仕事をやめるなんていう気は最初からさらさらなかったんです。

夫 差別問題、女性差別といったことは学生時代サークルでさんざん議論してきたことなので、結婚して共働きでやっていくというのはもう当然のことのように思っていましたね。

妻 学生時代のサークルの人は、今も子育てをしながら仕事を続けている人ばかりですよ。それによく「自分について来い」式の男性の結婚の際の言葉がありますよね。私はあれが一番嫌い。あんなこと言われたら絶対行きたくない。自分の人生を人に任せるなんて……。

夫 僕は彼女が仕事をやめるなんて言い出したらきつとおこるだろうと思いますね。何を弱音を吐くか、と。相手のためでもあるけれど、自分自身の生き方にもかかわることですからね。

家事の分担は

—— 現実には家事はどうなさっているのですか？ 大変でしょう。

妻 そうなんです。いろいろあって、しょっちゅう喧嘩ばかり。

夫 初めの頃は機械的に割りふって、結局料理には絶対手を出さなくなっちゃったね。得手不得手というものがあるでしょう。で、手伝える部分は手伝う。あと、最近子供にも分擔させられるようになりましたけれど……。

妻 でも必ずしも決めたとおりにはやってくれないんですよ。だからついこちらに負担がきてしまう。それが積もり積もってついにはガンガンガンと。それに、仕事から帰ってきててもそう。私はすぐにも台所へ立たなければならぬでしょう。ところがこちらは先ずゆっくりと座って新聞をひろげて……と、腹が立ちますね。どうしてこうなるのかと。第一「手伝う」っていう言葉は本当はおかしいんじゃないかと思うんです。私が主にあるみたいで……。そんなのは対等じゃないって感じ。あくまで「分擔」という関係なんだから。

—— ところで、女性が働いて一番気になることは子供のことだと思います。



います、その点については……。夫 上の子がまだ小さい頃はたいへんでしたね。

妻 夜中の十二時頃まで洗濯機をまわしていたりね。

夫 でも今は結構自分の時間が持てるようになりましたけれど……。

妻 えっ！ 私は持てないわよ。だから悔しいの。家の内外の細々としたことはつい私へ来ちゃうし、子供のこともそう。分担といっても結局女の人の方が仕事が多いんです。まだまだ不公平……。あつ、子供のこ

とね、私達が大変だというのは、もうそれは仕方がないというか、当然のことだと思えますけれど、ただ子供にとって両親が働いているというのは、それは親の勝手で……。その影響はどうしても受けますよね、それが申し訳ないと思っています。時間や気持ちに余裕があれば、子供への接し方ももっと違ってくるだろうし、疲れているとどうしてもせかしたり、おこったりということが多くなってしまうんですね。それで子供がギクシヤクしたゆとりのない子になっちゃうと困るなあって、心配してみたり反省したり。でもやはり犠牲とか何とかでなしに、ほんとは親が二人で働いていることを子供にも当然として受けとめてほしい、

と思うんですね。それに保育園も、子供にとって集団の中で鍛えられる場として大切な所と考えているんです。あとは休みの時に一生懸命子供とつき合っているんですけど……。

——子供と接している時間の長さではなく、その質の問題なのかもしれないね。

夫 そういうつもりなのですが……。で、家の中では何年前かにテレビを追放したんです。食事は皆で顔を合わせてゆつくりと。おかげで夫婦の会話もふえたかな。

妻 それから、私達みたいな場合、やはり周囲に協力し合える人達に恵まれていたということも言わなくてはならないと思います。お互いに子供をみ合ったり、同じような家庭の人達と共同で時間を延長してみている保育園を作ったり、と。たいへんでもありましたけれど、そういう人達とのつながりでささえられてきたという面もありますね。

と、まだまだ話は尽きないといううちに時間がきてしまいました。

考えてみると、長坂さん夫婦のように、二人の共通の人生観から仕事をもちはじめ、旦那さんの全面的な理解と協力（まだまだ奥さんは不満らしいのですが）が得られているというものは、まだまだ今は少ないケ

ースなのかもしれません。

しかし、今や男性の意識もかわりつつあります。今後はこういう夫婦は特殊というより、むしろもっと一般的なになってふえていくのではないかなと思われます。もちろん、そういう中であって「敢えて主婦」である生き方を選ぶ女性もあるでしょう。

それはそれで一つの生き方です。しかし、ともかくもそういう女性をも含めて、女性の何らかの形での社会参加は今後ますますふえることは必定です。社会もそれを必要としてきています。となると、そういう現状及び今後の動向の中で、長坂さん夫婦の抱えている問題というのは、当然これからの家庭にある程度起こり得ると予想されるいくつかなのではないかという気がするのです。

共働き家庭の抱える問題と今後の展望

では先ほどのお話から長坂さん夫



婦の場合の問題とは何か考えてみました。一つは、やはり子供の教育の問題。さまざまな方法で努力はしているものの、やはりそれですべて解決というわけにはいかない、という点。また一つは、お互いに同等の権利を持っているにもかかわらず、家事においてはなお女性の負担の方がはるかに大きいという点。こんなことが挙げられます。しかし、また二人の前向きな姿勢にはいくつかの見逃せない解決へのヒントも見出せます。例えば同じ環境にある親達が集まって、共同保育のシステムを作るなどといったこともその良い例ではないかと思えます。こうした助け合いのネットワークというものも、今後女性が社会に参加していくためには不可欠の条件であるということをお伝えられます。

ともかく、一人の男と一人の女とその子供とが作り上げる家庭、このあり方をこれといった一つの形にはめこむことはできません。家族全体が前向きに女性の社会参加を受けとめ、それに伴う問題とも力を合わせて向かい合う覚悟が必要だということ、これからの家庭をささえていく上で必要な基本的な認識なのではないかと思えます。

地域では

家庭をとりまく身近な地域社会と一番深くかかわりをもって生活しているのは、現状では家庭の主婦たちです。

人々の意識が、物の豊かさから心の豊かさを求める流れのなかで、連帯感のある地域社会を築いていくことが、ますます重要になっています。婦人の手で新しい時代を築く、婦人の地域社会への参加について、柳谷淳子編集員にレポートしてもらいました。

わたしの子供の頃を思い出してみると、どこの町内にも必ず評判のこわいオジサンがいました。いたずら坊主どもが、このオジサンに「コラ！」と大声で一喝され、一目散に逃げたが、逃げ遅れてつかまってしまった下級生を救いに、お説教覚悟であやまりに行くのは上級生の役目でした。お説教のあとでお菓子などいただいたことがなつかしく思い出されます。子供たちはいつも集団で行動し、近所で知らない子供などいなかったと思います。

おそらく大人の世界も子供の世界と似たりよったりで、近所でお互いに知らない人はいなかったと思います。このようなふんいきの中で隣近所の連帯感が生まれ、助け合いが行われていたのではないのでしょうか。

世の中の移り変わりとともに、個人も家庭も孤立化の傾向を強め、連帯感が失われています。また、同時に個人や家庭が、子育てや老人の介護やゴミ処理など、身近な生活の処理能力を失ってきています。

そこに住む人々が協力して、安全で快適でうるおいのある生活環境をつくり出して行くために、新しい地域づくりがいまほど必要なときはありません。

そこで、わたしたち女性が新しい地域づくりにどのように参加したらよいか、また、どのような活動がなされているか、地域活動を活発に行っている地域婦人会を構成員とする静岡県地域婦人団体連絡会の芦川緑会長にお話をうかがいました。

新しい地域づくりに婦人の力をいかしていくためには、まず、どんなことが必要でしょうか。

婦人が地域の問題に自主的に取り組む姿勢が一番大切です。

女性は男性についていけばよいという考え方がまだまだ多いようです。男性が企画した活動に受け身の形で参加するのでは進歩がありません。

地域の生活課題を婦人の眼でとらえ、その解決のために婦人が手をつないで、自ら行動を起こすことが住みよい地域をつくることになるのです。

また、問題意識を持って活動することが、女性自身の資質の向上にもつながるのではないのでしょうか。

より多くの婦人の参加を求めていくためには、何が必要でしょうか。

地域における共通の問題の発見と、

活動への参加の呼びかけが必要ではないかと思えます。たとえば、団地などでは隣近所とのつきあいをよくするために「あいさつ運動」を展開したり、子供の洋服や学用品の交換の場として「おさがりセール」をはじめたところもあります。これらの活動がきっかけとなって、青年団や老人クラブと一緒に地域ぐるみの活動に発展しています。また、ある市では婦人が中心になって商店街をいきいきさせようと立ち上がったところ、その熱意で自治会を動かし、難かしい商店街のコミュニティづくりがすすめられています。

最近では働く婦人が増えて、地域活動への参加が難しくなっているという話を聞きますが……

婦人が自分の能力をいかして職業を持つことは、大変よいことだと思います。しかし、そのことによって地域社会への参加ができないのでは、男性と同じ「仕事人間」になってしまつて、婦人が職業を持つ意味がなくなつてしまふのではないのでしょうか。

いそがしいから地域活動に参加できないという人がいますが、集会に参加するだけが活動ではないはずで



芦川 緑さん

す。
たとえば、わたしたちは「生活排水を考え、汚水を少なくする運動」に取り組んでいます。河川の汚染を防ぐため、米のとき汁をそのまま流さないという小さなことでも、一人ひとりが実行し、活動に参加することが大切です。
また、働く婦人との連帯を深めるため、

- ① 残業で遅くなる
- ② 子供が急病
- ③ 職場で大事な仕事があつて休めない

きたいと思っています。

—◇—◇—

地域づくりは、婦人だけの責任ではありませんし、婦人の力だけでできるものでもありません。男性と協力して取り組むものだと思います。この協力のあり方を考えるため、男性は婦人の地域づくりへの参加をどのように見ているか、地域で積極的な活動をなさっている「沼津市大岡地区青少年を健やかに育てる会」の田村浩祥事務局長にお話をうかがいました。



田村浩祥さん

婦人が地域社会へ参加することについてどうお考えですか。
婦人が地域の問題に積極的に参加することは非常に大事なことだと思います。婦人の参加なくしては地域活動は成り立たないとも言えます。

しかし、活動の主旨を理解し、問題意識をもって参加している人が少ないことも事実です。たとえば街頭補導に出たいだけでも、ただ立っているだけでは長続きしないと思います。

青少年の問題などは、母親としての立場で婦人の参加は欠かせませんが、自分の子供のことは熱心でも、他人の子供のことは無関心の母親が多いですね。もっと広い視野と心をもつて欲しいと思います。

大変耳の痛いお話ですが、婦人の力を地域社会の発展にいかしていくにはどうすればよいとお考えですか。

能力や意欲がありながら、それをいかしていない婦人が多いのです。この人々を組織的に活動に参加してもらえるシステムを作ることが必要だと思います。たとえば「ボランティア・バンク」。これは過去リーダーとして活躍した人や、地域活動に必要な技能・資格を持った人を登録しておき、活動内容によって必要な人材を派遣するシステムです。

同時に、婦人の目で地域の課題を発掘し、活動を展開していく能力のある視野の広い婦人リーダーを養成

していくことが必要ではないでしょうか。

インタビュを終わって

地域での積極的な活動をなさっているお二人のお話をうかがって、多くの婦人が地域づくりに取り組んでおり、婦人の参加が大切なことがわかりました。

しかし、婦人対策室が昭和五十五年に行った婦人の地域活動に関する調査によれば、現実には地域活動に参加している婦人は三〇%にすぎません。これは、婦人が日常生活の中で何か取り組んでみたいと思っても、どのように実践活動に入っていくからよいかわからないということがあられるのかもしれない。

毎日の生活を地域で支えている婦人こそ、地域の課題を見つめる目を持っていきます。豊かでうるおいのある地域づくりには婦人の参加が欠かせません。

いま、わたしたちのだれもが社会をささえるひとりとして、地域づくりへの参加が求められています。

そして、地域への参加がわたしたち自身にとっても、大きな成長の糧になることも確かであるといえそうです。

職業では

女性の手で新しい時代を築くためには、女性みずから社会のあらゆる分野に積極的に参加することが求められています。しかし、女性が社会に参加する道が明確になっている訳ではありません。家庭中心の生き方から、新しい生き方を作りあげていく努力が必要です。

こうした状況のなかで、職業を通して社会に参加する女性について、山形美恵子編集員にレポートしてもらいました。

再就職を希望する主婦が増えています。内職もパート勤務もしていない主婦のうち、四三％（五十四年総理府「婦人に関する世論調査」）の人が就職を希望しています。その背景には、女性のライフサイクルの変化、家事労働の軽減化、実質賃金の目減りなどがあると考えられます。

このような状況を反映して、さまざまな角度から書かれた再就職情報が氾濫していますが、実際問題となると思い通りにいかないのが現実です。主婦の再就職の動機は、「より豊かな暮らしを望んで」という場合も含めて、経済的理由が第一位を占めています。しかも家事をこなす主婦としての役割を、今まで通り果たした上で働きたいというのですから、仕事を選ぶポイントが、職種、収入というよりも、労働時間におかれるのも当然といえましょう。

ところで、実際に職業安定所に足を運び、新聞の求人広告に目を凝らし、知人を介して仕事の斡旋を依頼してみても、改めて自分が三十〜四十代の、これといった資格のない主婦であることに気づかされるのです。再就職の動機は主に経済的理由にあるのですが、たとえばローンの支払いのため、教育費捻出のためとはい

いつつも、あくまでも家計補助的な意味でしかなく、ぜひとも働かなければならないというしつかりした目的意識を持たない場合は、「私にあらう仕事がない」とあきらめたり、特に資格を必要としない職種を安易に選ぶことが多くなるのではないのでしょうか。

しかし、人生八十年という女性のライフサイクルの中で、このような働き方がベターなのかと考え、迷った末行動をおこし、自分の能力が開発できて、将来への展望が開ける職場へと挑戦する人も増えています。今回はそうした道をたどった右田昌恵さん（静岡市在住・三十七歳）にお話しをうかがうことにしました。

家族の協力で 再就職スタート

——右田さんが再就職なさったきっかけをお話しいただけませんか。

主人の病気がきっかけです。胃腸を悪くしまして会社を休むことが多くなったものですから。偶然店先に求人広告を見つけ、文具店の配達員になりました。若い頃何気なくとった運転免許が思わぬ所で役立ちました……。

——家事はどうしましたか。

はい、私の母が近くにおりましたので。まだ下の子が四歳でしたし、洗濯物をたたんでもらったり、晩ごはんの材料を買ってもらったり、ずいぶん分助かりました。

——活動的な右田さんに配達のお仕事はお似合いではなかったかと思うのですが、なぜやめられたのですか。

外まわりの仕事は年をとってからはできないでしょう。どうせ働くなら一生続けられるものと思ったんです。新聞の求人欄を毎日見たりしましたが、資格がものをいうんですね。看護学校やコンピューターの学校に出かけ調べたりもしました。そんなとき静岡市の広報紙で、特別養護老人ホームの寮母募集の案内をみまして早速申し込みました。外まわりの仕事でなく、しかも特に資格もいらぬというのが一番でした。寝たきりのおじいさんやおばあさんの介護が仕事で、世間話をしながら顔を刺つたり、下の世話をしたり、人間相手の仕事は楽しかったですね。

——寮母さんといえますと、泊まりもあつたんですか。

週に一回の夜勤がありました。家

事は全部私がやるものと思っていましたので、夜勤のとき主人や子供たちの夕食の準備はできて、次の日の朝の仕度ができないのが悩みでした。母が手伝ってくれたからやっていけたのですが、母が弱って手伝いに来られなくなるとき、この仕事はやめざるを得なくなってしまうのです。

資格を求めて 高等職業訓練校へ

やめてから夜勤のない職場で半年ほど働きましたが、やっぱり技能を身につけて働きたいと思い立ち、職業安定所で偶然見つけた県立静清高等職業訓練校に応募しました。能力再開発訓練の経理事務科で、三十代以上の女性も十人以上いました。八時から三時四十五分まで一年間、簿記、タイプ、珠算をみっちり学ぶことができました。おかげですべて二級の資格がとれました。

— 入学試験はむずかしいんですか。
いえ、体力テストと適性検査と面接で簡単でした。

— 費用はどうですか。

授業料は無料です。それに私の場合、雇用保険金を受けている間に、高等職業訓練校に入りましたので、雇用保険の適用が延長になって助かりました。授業料もいらず、再就職を手助けしてくれるコースがいくつもありますから、もっとみなさんが利用されればよいと思います。

— 職業訓練校を卒業されてすぐ就職出来ましたか。

ええ。家庭のことをあれこれ考えて、ゼいたくかとは思ったのですが、土曜日が半日勤務という条件のところを探してすぐに見つけました。でも、実際の職場でしつかりやろうと思うと、私の得た技術はほんの入口のところではかありませんから、まだまだこれから勉強していかなければなりません。

インタビューを 終えて

資格をとり現職に就くまでの右田さんのエネルギーに感心しながら、主婦の再就職の問題は本人の生き方と深くかかわっているとの思いを新たにしました。

— 再就職のさいに資格や技能を持つ



県立静清高等職業訓練校

ていることが武器となることは、右田さんの例に見られる通りです。その意味からも、能力再開発に真剣に取り組む必要があります。しかし、それで十分なのではない

か。資格も取った、働く意欲も十分、なのに一人の職業人として責任をもつて働けないという現実があります。それは家事、育児などを一人でしょいこみ、これを主婦固有の役割として受け入れて働く場合がそれです。子供の病気の看護も、授業参観も、ゴミ処理も主婦が一人で行うような働き方——右田さんはそのようにやってきたのですが——これでよいのでしょうか。

男性であれ女性であれ、責任ある仕事に期待されているのに、「男は職場」、「女は家庭」の意識はまだまだ揺がず、女性が働く際の障害として立ちはだかっています。

女性が職業を通して社会に参加していくことを考えるとき、「仕事人間」にならざるを得ない男性の労働のあり方を視野に入れ、本当に人間らしい生活のあり方を、社会的な問題として考えると同時に、それぞれの家庭内で個人個人の問題として、たゆみなく問い直して行くことが必要なのではないのでしょうか。